はじめに

私がはじめて協働的な学びと出合ったのは、今からもう10年以上も前、当時主宰していたサークルとは別のとある教育サークルに参加して実践を聞いたときのことでした。

そのときの私は、「こうすれば子どもたちがこのような反応をする」「こう指導すれば子どもたちがこのようにできるようになる」といったいわゆる「古典的プロフェッショナル」と言われる技術を必死に追いかけ、自分自身もそれに基づいた指導を積極的に実践していました。当時の私の授業力はほぼゼロに等しく、子どもたちの前に立っても何が正しいのかも分からずに、ただ必死に「それなりの授業」を成立させて乗り切ることくらいしかできませんでした。

そんな私に、ある転機が訪れます。それが、前述の「とある教育サークル」で目にした学習法との出合いでした（ちなみに、とあるサークルとは、「六甲SFclub」という兵庫県内で活動していた教育サークルです）。そこで目にした「学び合い」の授業実践映像は、それまで私が描いていた授業像とはまるで違っていたのです。

・授業時間に子どもたちが自由に話し合ったり移動したりしている
・もはや教師がどこにいるのかすら分からない
・とにかく子どもたちがずっと活動し続けている

さらにクラスの取り組みとして、「１週間の学習計画を子どもたち自身が決めている」「教師の出番は冒頭の５分程度で、あとは子どもたちが自分で学習を進めている」といったことも教えてもらいました。もちろん、実践していた先輩教師はいわゆる一斉授業を批判しているわけではありません。必要な場面に応じて、一斉授業も行っていました。ただ、当時の私には、「学び合い」による学習はあまりにも衝撃的な授業だったのです。

授業とは、教師の指導技術がすべてであり、子どもたちに学習を身につけさせるのは教師であるという前提を疑ったことがありませんでした。

そして、私が先の先輩の実践を知り、もっとも大きく影響を受けたのは、「子ども観」です。「子どもたちは学びたがっている存在である」「子どもたちは自分の学習を自分で乗り越える力をもっている」、そんな当たり前の「観」が大きく変わったのでした。

この出合いをきっかけに、私自身も「子どもたちが学び合う時間」を意図的に設けるようにしました。また、「一斉授業か、協働学習か」の二項対立を乗り越えるためにも、自分なりに実践を積み重ねていったのです。その取り組みから10年以上にもなりますが、その間に「ただ子どもたちだけに任せるだけではうまくいかない」「一斉授業と協働学習のバランスが大事」「どのような授業形態でも必要な授業観がある」ことなどが見えてきました。

本書では、そうした実践を通して培ってきた「知見」や「ポイント」、さらには「観」を余さず紹介させていただきました。協働的な学びをもっと取り組んでみたいけれど具体的な方法が分からない、実際に協働学習に取り組んでいるけれど、なんだかうまくいかないという先生方には、特にお役立ていただければと思います。

さあ、本書を開き、ともに協働的な学びについて考え、深めていきましょう。協働的な学びがさらに充実し、たくさんの教室が子どもたちのもつエネルギーであふれることを願っています。

丸岡慎弥

CONTENTS

はじめに……3

Chapter1

子どもが自分で動き出す！「協働的な学び」の超基本

1 そもそも「協働的な学び」って、どういうこと？……12
2 個別最適な学びと協働的な学びの一体化で深い学びが実現する……14
3 主体的・自立的に取り組むことで学習効果はグッと高まる……16
4 教師は伴走者！　子どもたちには「学び方」を教える……18
5 誰と協働させるのかを明確にする……20
6 「考えたこと」「分からないこと」を共有させる……22
7 友だちの意見について考えさせる……24

8 フィードバックしながらよりよい姿を目指す……26
9 「個の学び」から「学び合い」につなげる……28
10 クラウドの活用でスムーズかつ相互的な学びを仕組む……30

Column 1 1年生での協働的な学びの始め方……32

Chapter2

決め手はここ！「協働的な学び」を成功させる7つのポイント

1 ポイント1 目的をきちんともたせる……34
2 ポイント2 「ズレ」を意識させて知識・情報を共有する……36
3 ポイント3 教師が対話を仕掛ける……38
4 ポイント4 「一緒に作業」の時間をつくる……40
5 ポイント5 フィードバックを送り合う……42
6 ポイント6 問題点を整理させる……44
7 ポイント7 授業デザインとつなげる……46

Column 2 2・3・4年生での協働的な学びの取り組みポイント……48

Chapter3

どの子も主役に！
子どもが主体的に学び出す学級づくり

1 協働的な学びは確かな学級経営から……50
2 朝の会で「今日1日の見通し」をもつ……52
3 朝の会で「1日の目標」を宣言する……54
4 配り物、係&当番活動、給食で協働の力を引き上げる……56
5 掃除で協働の力を引き上げる……58
6 帰りの会で「1日の振り返り」を発表させる……60
7 クラスに「会社活動」を取り入れる……62

Column 3 高学年での協働的な学びのポイント……64

Chapter4

ここが成否の分かれ道！
「協働的な学び」の進め方

1 まずは「ゴール」を共有……66
2 学習内容と人数設定を事前に確認する……68
3 机の配置を取り組みに合わせて調整する……70
4 チェックポイントをつくる……72
5 役割をもたせて状態をチェックする……74
6 進み具合を共有していく……76
7 子どもたちの経験に合わせて教師が助言する……78

Column 4 協働的な学びを活性化する教師の言葉かけ……80

Chapter5

「もっと学びたい！」が飛び交う教室に！
教科別実践事例

1 国語科 漢字&音読学習……82

2 国語科 初発の感想……84
3 国語科 作文を書く……86
4 社会科 「気付いたこと・疑問」を共有する……88
5 社会科 子ども同士で調査してまとめる……90
6 算数科 問題を教え合う……92
7 算数科 自分の考えを発表する……94
8 理科 実験や観察で役割を分担する……96
9 理科 考察やまとめを一緒につくる……98
10 音楽科 歌をうたう……100
11 音楽科 リコーダーのスキルアップをはかる……102
12 図画工作科 グループで協力して作品を作り上げる……104
13 図画工作科 作品をフィードバックし合う……106
14 体育科 それぞれの技を見合う……108
15 体育科 協力してゲームを進める……110
16 特別の教科 道徳科 教材から感じたことを共有する……112
17 特別の教科 道徳科 話し合いを通じて練り上げる……114
18 特別活動 自分たちの課題を解決する……116
19 総合的な学習の時間 みんなで目的を共有する……118
20 総合的な学習の時間 共同編集機能でチームワークを発揮する……120

Column 5 これからの小学校教育における一斉学習のメリットとは……122

Chapter6

メリット盛りだくさん！
これからの時代に不可欠な「協働しながら学ぶ力」

1 １人１人が自分らしくみんなと自由に……124
2 自律とコミュニケーション力が引き出される……126
3 多様性を認め合えるクラスづくり……128
4 自治的なクラスへと成長させる……130
5 問題解決力が高まる……132
6 「教える」システムから「学びを支援する」システムへ……134
7 学びをリアルな社会につなげる……136

Column 6 教室から飛び出す協働的な学び……138

おわりに……139

1 そもそも「協働的な学び」って、どういうこと？

「協働的な学び」は、現在の教育にはもちろん、未来の教育に欠かせない大切なキーワードであることをまずは押さえておきましょう。

学習指導要領における協働的な学び

「子どもたち同士の学び合いが大切」「子どもたちが協働して学習ができるように」などと盛んに言われてきていますが、そもそも「協働的な学び」とは、どのような意味なのでしょうか。教師自身がその言葉の意味を正しく理解していなければ、その実現はかないません。

この「協働的な学び」は、現行の学習指導要領におけるキーワードともなっています。文部科学省が発行する各種資料の中には「協働的な学び」という言葉が頻出しています。イメージだけに留めず、まずは原典にあたり、丁寧に目を通していくことが必須です。

協働的な学びが目指すところ

令和３年の中央教育審議会「教育課程部会における審議のまとめ」では、協働的な学びについて、「探究的な学習や体験活動などを通じ、子供同士で、あるいは地域の方々をはじめ多様な他者と協働しながら、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、様々な社会的な変化を乗り越え、持続可能な社会の創り手となることができるよう、必要な資質・能力を育成する」と書かれています。キーワードの真の意味理解のためには、意図や課題とするところ、ねらいも確実に押さえていきましょう。

協働的な学びに欠かせない２つのポイント

前述の審議のまとめの中で、もっとも重要とされるのは、「探究的な学習や体験活動などを通じ」「子供同士で、あるいは地域の方々をはじめ多様な他者と協働しながら」の２点であると私自身はとらえています。まずは、ただ協働するのではなく、協働と関連する学びの体験が伴うことが大切であるということです。

さらに「他者」は、子ども同士のみならず地域の方々、さらには保護者、教師などと多様であることも念頭に置くことが不可欠です。

ここが押さえどころ！

ADVICE!

どの学年においても「協働的な学び×○○」が大切です。ただ協働するだけでは深い学びにはつながりません。学習活動の内容や発問を工夫し、その取り組みの中でどう協働させていくのかを丁寧にデザインしましょう。

1 ポイント1

目的をきちんともたせる

協働学習を日常的なものとして定着させ、高めていく秘訣は、日頃から子どもたちにその「意義」を語り伝えていくことです。

意義を語らずして成功なし

クラスにはじめて協働学習を積極的に取り入れようとするとき、もしくは、前年度の担任教師があまり積極的に協働学習を実施していない状況で協働学習を導入しようとするとき、特に忘れてはいけないことがあります。それは、協働学習について繰り返し子どもたちに語り、その意義について理解させておくことです。協働学習とは、自分だけではなく、クラスのみんなと関わりながら学習することであることを伝えるようにしましょう。

また、低学年の場合には、学級通信や最初の保護者会などを活用して、保護者にも細やかな説明を行い、共有しておくことも重要です。

固定概念があるからこそ説明する

なぜ、そこまで丁寧に下地づくりとしての説明が必要なのでしょうか。それは、子どもにも保護者にも、「授業とはこうである」という固定概念が多少なりとも存在しているからです。そして、大多数にとって、無意識にその固定概念は正しいとされてしまっているのです。

もちろん、どちらが正解かという話ではなく、新しいことを進めるにあたっては、そうした状況を認識して整えておく必要があるのです。

目的が見えなければ前進できない

一般的に、人は「なぜ、〇〇しているのだろうか」と、理由が分からない状態を嫌うものです。それは、霧に覆われて前が見えない状態で車を走らせているようなもので、非常に大きなストレスとなります。

協働学習の取り組みをスタートさせる前段階で、ぜひ、繰り返し目の前の子どもたちにその目的・意義を語っていきましょう。「自分から進んで学習する力が身についていくよ」「友だちの考えや意見を聞くことで、自分の考えが深まり、内容の濃い学習になるよ」といった具合に伝えていくようにします。

ここが押さえどころ!

ADVICE!

特に、子どもたちの将来において必要な力（自分でゼロからイメージしたものを具体化してつくり上げていく力など）が協働学習の積み重ねによって身についていくことを強調しましょう。

14 ▶ 体育科

それぞれの技を見合う

体育科の授業の中でも、特にマット運動や跳び箱運動、さらには鉄棒などの器械運動を中心とした学習では、協働学習が機能します。

テクニカルポイントを協働学習につなげる

音楽科などと同様に、体育科でも技能系の学習では、協働学習に取り組みやすい教科です。それは、完成形が明確であることによります。具体的には、それぞれの運動におけるテクニカルポイントをしっかり押さえれば、技の成功確率がグッと上がります。

この点を踏まえて、協働学習で技をみがき合う授業をデザインしてみましょう。

システム導入で流れをつくる

体育科の特質を協働学習の中で効果的につなげていくために取り組みやすいのが、子どもたち同士で技を見合うというシステムを導入することです。例えば、マット運動であれば、自分の演技を友だちに見てもらい、自分の演技が終わったら次は友だちの演技を見て、再度演技の列に並ぶといった流れをつくっていくようにします。

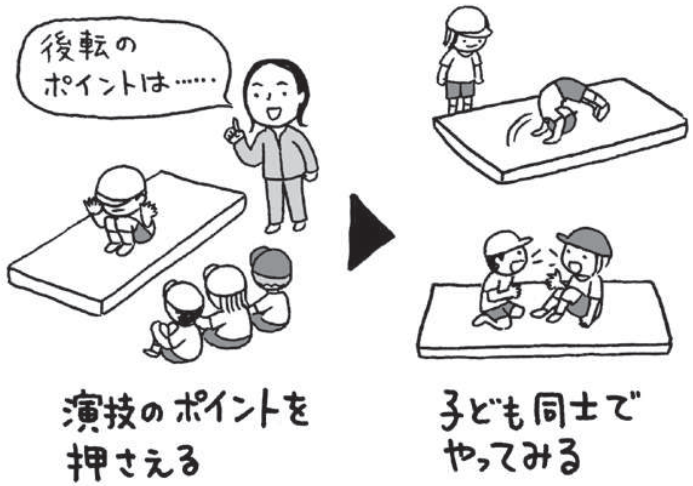
すると、子どもたち自身にも、「演技をする→見る」というサイクルが自然に身につき、子ども主体の学習環境がつくられていきます。

子ども同士で技のポイントを教え合う

子ども同士で演技を見合うとき、実際にどのような対話が生まれるといいのでしょうか。それは、やはり演技のポイントをもとにした対話です。そのためにも、クラス全体への指導の際に、教師が丁寧に演技のポイントを説明していくことが欠かせません。

ここでしっかりとポイントを理解できているかどうかが（運動として表現できるかどうかは別として）、体育科における良質な対話の分岐点となります。

ここが押さえどころ!



ADVICE!

テクニカルポイントを教師が分かりやすく伝えられているかどうかで、クラス全体としての学習の質は大きく変わります。技ができることと、コツが言語化できるかどうかは別だからです。